

りんせん通信

10
2025

発行：アロマセラピールーム林泉 <http://rinsen-aroma.com>

2025年10月7日発行(通巻第171号)

～香りの植物見学記(23)～

ランジャタイの香りを体験しに、 「正倉院 THE SHOW」に行ってきました。



奈良時代の宝物がよみがえる

9月の終わり、台東区の上野の森美術館で開催中の「正倉院 THE SHOW」に行ってきました。数々の展示品のなか、とりわけ期待が高まるのは、ランジャタイです。今回、歴史上はじめて香りを体験できるということで、ワクワクしながら向かいました。

日本で一番大きな香木

ランジャタイは、ジンチョウゲ科の木でできた日本で一番大きな香木です。名香の評判が高く、正倉院の宝物のなかでも特に大切に保管されてきました。けれども残念なことに、実物の香りは嗅げません。展示には、大河ドラマの小道具が代用されていました。



信長がどうしても欲しかった香り

ランジャタイには、切り取った跡がいくつかあります。そのなかの一つは、織田信長によるものと言われています。信長は天皇家の宝を半ば強引に手に入れましたが、香りを楽しむためというより、自分の力をアピールするのが目的だったようです。

成分を抽出し、香りを再現

ランジャタイの香りは、レプリカで体験できます。香料の研究者が、1ミリほどの脱落片から成分を抽出し、完成させたそうです。私も嗅いでみましたが、甘さ、渋さ、辛さなどさまざまな要素が感じられました。複雑なのに、まろやかに溶け合っています。



銀薫炉は、見た目も仕掛けもすばらしい

写真は、銀薫炉といって、着物に香りを焚きしめる道具です。直径は18センチあり、世界でもこの大きさは珍しいそうです。球のなかには香木を焚く火皿がありますが、羅針盤構造になっていて、どこに置いても水平になるよう設計されています。

フェイシャル割引

詳しくはこちら
11月30日まで



おすすめアロマグッズ No.139



お香～香木の香り・沈香
(鳩居堂)

沈香は、ジンチョウゲ科の木の樹脂を化石化した香木です。香木を焚くのは少々手間がかかりますが、お線香という形で気軽に楽しめるのがこちらのアイテムです。

火を灯すと、ふんわりとスパイシーな香りが広がります。例えるならば、お寺に漂うお焼香の香りでしょう。透明感と深みが絶妙なバランスで混ざり合い、気持の芯がスッと伸びるような感じました。

編集後記

メイン記事でご紹介のランジャタイ、注目していたのは私だけではなかったようです。ミュージアム・ショップでは、香り付きの「蘭奢待香りカード」が売り切れで、この日は入手できませんでした。

ランジャタイは、香木としては沈香のカテゴリーに入り、その最高級品とされています。そこで、雰囲気を確認するために、沈香の香りがするお香を買ってみました。比べると、格は少々落ちるかもしれませんが、これはこれで素晴らしい香りです。感想は、上記の「おすすめアロマグッズ」でご紹介した通りです。